東方中 2 病大戦

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方中2病大戦

【Nコード】

N04420

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

ここは幻想郷と呼ばれる世界。この世界では、戦いが日常茶飯事だった。しかし、彼女達の戦いに、明らかな異変？が訪れていた

（前書き）

前書き

この話は、重度の中2病患者である作者が、発作をどうしても抑え切れなかった為にやってしまいました。

反省はしています。後悔はしていません！！

なので、あなたの心の何かが限界にきそうになったら、すぐに戻るを押してくださいね。

では、どうぞ。

「・・・今日はいつになく、決め込んでるわね、魔理沙。」

魔法の森の上空で、七色の人形使い、アリス・マーガトロイドが、正面に対峙している、力の魔法使い、霧雨 魔理沙に言い放った。魔理沙自身は、顔を手と帽子で隠し、表情を覚らせないような様子である。

「そういうアリスも、嫌ってほど伝わってくるぜえ・・・この辺りに散らばせてるんだろ？上海達を・・・」

帽子を上げ、不気味に笑った顔をアリスに見せた。覚られたアリスは、気圧されるどころか、むしろ笑ってきた。

「さすが魔理沙ね、でも気づいた所でもう遅いわ・・・あなたはもう逃げられない！！」

手にいつも持っている魔道書を広げ、手も触れずにばらばらとペーシをめくっていく。

本は光り輝き、魔理沙を取り囲むように、無数の魔方陣が現れていた。

「我が僕達よ！！聖なる光をその身に宿し、我が黒き怨敵をその手で屠りなさい！！魔符、セイントオーラマジック！！」

その詠唱が唱えられた時、魔方陣から光り輝く上海人形達が、ほぼ一斉に魔理沙に襲い掛かった。

しかし、魔理沙は上海の攻撃の雨をぬうように避け続け、ぶつぶつ

と詠唱を始めていた。

「……絶対的な黒き力よ……我が魂に応えたまえ……我が難敵を……」

アリスはそれを阻止せんと、手元にいる上海を媒介に、巨大なビームを放った。

「させないわよ、魔理沙！！」

詠唱と上海の回避に集中している魔理沙では、そのビームが避けられそうになかった。

そして魔理沙は、アリスの放ったビームに呑み込まれてしまった。

「はははは！！やったわ！！これで私の勝利……」

アリスが勝利を確信したその時、ぼろぼろになった魔理沙がアリスをじっと見据えていた。

魔理沙の背後には、魔理沙より二回りは大きい魔方陣が現れていた

「どうしたアリス？あたしはまだ戦えるぜ？いや、もう終わりだアリス……あたしの最強の魔法を、見せてやるよ！！」

魔方陣が光り、黒き力が魔理沙に集まっていく。

その力は魔理沙の手元に集まっていき、黒と虹色が混ざったような色になっていった。

そして、その力がアリスに解き放たれた。

「行くぜ！！黒魔！！ブラックマスターアスパアアアアアク！

！！！！」

解き放たれた力は、圧倒的な大きさにアリスに襲い掛かった。

「馬鹿な・・・この私が・・・この私がああああ！！！！」

避ける事も出来ず、アリスはその力の前に敗れた。

地に落ち、ノックアウトしたアリスに、魔理沙が帽子を脱いで言い放った。

「ちんけな力を集めても、あたしには絶対勝てないぜ！！」

決め台詞を言い放ち、ポーズを決めこんだ。

「さて、次の強敵を探しに行こうか。」

帽子を被り直し、どこへなりと飛び去っていった。

その近くから、彼女達の戦いを見ていた者がいたともしらずに・・・

場所は変わって、ここは妖精達の住む湖。

その場所で、青き妖精、チルノと、緑の妖精、大妖精が、お互いの全力を尽くして戦い抜いていた。

「さすが大ちゃんね！！アタイはいつかこうして、ケリをつけたかっただのよ！！」

巨大な氷の塊をその手に創り、大妖精に放った。

その氷の塊は大妖精の体を突き通るようになり抜けていった。

「な！？まさかこれは・・・」

それに気づいた時には、チルノの回りを無数の大妖精が取り囲んでいた。

「誰が本物か・・・わかる、チルノちゃん？いえ・・・わかる前に終わらせてあげる！！」

無数の大妖精が、一斉にチルノに襲い掛かっていった。

ピンチかと思われたチルノだが、その顔には余裕を見せる微笑を浮かべていた。

「そうだね・・・もう終わりにするよ！！氷の眷属達よ！！我が手に宿り、大地を凍らせる！！氷符、アイススパイクニードル！！」

片手に氷のオーラを纏い、地面にその手を降ろした。

その瞬間、チルノを中心に、氷の針山が地面を続いていった。

無数の大妖精達は全て、その針に貫かれていき、次々と姿を消していった。

しかし、その場にいた大妖精が全て消えて、本体すら残っていないかった。

「あれ？どういう事？」

チルノがその状況に戸惑っていると、大妖精がチルノの真後ろに立っていた。そう、その場においては一つしかない安全地帯に。

「残念ね・・・全ては囿・・・チルノちゃんは、私の畏に引つかかったのよ。この距離なら、チルノちゃんは私の攻撃を避けられない

わ・・・」

大妖精の攻撃に、チルノが反応しようとしたが、全ては手遅れだった。

「速符！！シューティングインパクト！！」

大妖精の圧倒的スピードから繰り出された一撃によって、チルノは吹き飛んでいった。

森の木を何本も折っていき、土煙を上げながら、チルノは吹き飛んでいった。

しばらくして、ようやくチルノは止まったようである。

木に貼り付けの状態になったチルノは、もう動けそうになかった。

「ふふふ・・・この勝負、私の・・・」

と大妖精が言おうとしたその時、貼り付けになっていたチルノが、形を崩して粉々になったのだ。

「なに！？」

大妖精が驚いている内に、チルノの声が大妖精の上からしてきた。それと同時に、大妖精のいる場所に大きな影が落ちてきた。

そう、チルノが上空で滅茶苦茶な大きさの氷を創っていたのだ。

「残念だったね大ちゃん・・・それこそアタイの囷だったんだよ！
！じゃあ、今度はアタイの番ね！！氷の裁きを受けなさい！！大氷
！！アイスメテオ！！」

創った氷が、なんのひねりもなく大妖精に落ちていった。いや、そ

れだけで十分過ぎたのだ。

「これが・・・私の終わりですつてええええ!!!」

そして大妖精は、文字通り氷の裁きをその身に受けたのであった。誰もが認める本当の決着。チルノがビシッと決め込んだ。

「アタイに勝とうだなんて、百万光年早かったね!!!」

締めくくる台詞を言い放つチルノ。

「そんじゃ、もっと強い奴を探しに・・・」

と思い立ったその時、さつきアリスと戦っていた魔理沙が、チルノの前に立ちふさがった。

アリスとの戦いの傷は治し、魔理沙は万全状態であった。

「せつかくだ・・・お前に挑んでやるよ、チルノ!!!」

「そう・・・いいわよ!!!大ちゃんじゃ物足りなかったから、魔理沙なら満足できそうね!!!」

二人の戦いが、今まさに始まるうとしたその時、その戦いを止めんとする声が響いてきた。

「待ちなさい!!!」

二人は動きを止め、声のした方に振り向いた。

そこにいたのは、幻想の巫女、博霊 霊夢であった。

「あなた達・・・自分の身に起きている異変がわからないの？」

霊夢の問いかけに、二人ともはてなと言った様子を見せた。

「やっぱりわかっていなかったのね・・・それも仕方ないかしら。

これは本人どころか・・・周りにも影響を及ぶし、わかる事も出来ないのだから・・・」

「ど、どう言う事だ？説明してくれ、霊夢。」

「ええ、言っただけあげるわ。今あなた達の身に起きている異変を。簡単に言うのなら・・・あなた達は、中2病にかかったのよ!!」

「ちゅ、中2病!?なんだよそれ!？」

「これはね、あまりにも恐ろしい病なのよ・・・本人は自覚していないだけじゃなく、周りにもゆっくりとその影響を出していくのよ・・・」

「か、感染症みたいな物か!？」

「いえ、今回ののは恐らく異変レベルだと思うわ。だってあなた達が、なんの突拍子もなく感染しているのだから。」

「じゃあ・・・この異変に、黒幕がいるって訳か!?!だとしたら、あたしたちは一体どうなるんだよ!?!」

「・・・それが中2病だって言うのよ。」

「あ、そうなんだ・・・」

「大丈夫よ、もう検討はつけてるから。ほら、紫。」

と霊夢が呼びかけると、隙間から八雲 紫がその姿を見せてきた。その手には週刊少年チャンプが握られている。しかも表紙がめだかエックスであった。

「ごめんなさいねえ、外の雑誌見てたら、面白そうだったからついやっちゃったのよ。」

その台詞を聞いた瞬間、魔理沙とチルノは全身の力が抜けたようなリアクションをとった。

「だあああ……」

そんな二人は無視して、霊夢は紫に問いかけた。

「とにかく、もう手は施したのよね？紫？」

「ええ、でも……あれは多分手遅れね……」

と紫が言っていると、四人は圧倒的プレッシャーを感じ取った。

感じ取った先にいたのは、黒い球体の中にある……闇のおとし子、ルーミアであった。

「どうしたの？戦いを始めましょう？あなた達全員が死せるか……私が果てるか！！この戦いの先に、真の強者が決まるわよ！！」

漆黒の翼を広げ、十字架のような剣を構えて、全員を威圧するように睨んだ。

「・・・紫、あれつてもしかして・・・」

霊夢が冷や汗をかきながら、紫に尋ねた。

「そうね・・・確実にそうよ。あれは中2病が昇華した存在・・・邪気眼よ!!」

「じゃ、じゃきがん？」

「なんだよそれ!？」

魔理沙とチルノの二人が、驚きを隠せずに行った。

「邪気眼は・・・中2病が更なる力を持った時に生まれる存在・・・その感染力は、中2病の比じゃないわ!!」

そう語る紫に合わせるように、全員は戦う構えを見せた。そう、目の前の難敵を倒す為に。

「そうか・・・それは倒さなかつたらやばいぜ。」

「上等よ!!アタイの力とみんなの力を合わせれば、どんな敵が来ても怖くないわ!!」

「・・・仕方ないわね。今回は協力した方がよさそうだから、組んであげるわよ。」

「ふふふ、多分私に責任があるから、私も混ざるわね。」

そして選ばれし四人の戦士は、最強の敵に挑んでいった。

「面白いわ!!見事私を超えてみなさい!!その力を持って!!私がそれを叩き潰してあげるわよ!!」

最強の敵の一声に、魔理沙が四人を代表するように言い放った。

「ああ・・・超えてみせるさ!!」

そう、彼女達は、紫が何かをする前から、既に中2病であったのだ。

彼女達の戦いは、その後の歴史に刻まれるのであった。

東方中2病大戦 FIN

(後書き)

書き

どうでしたか？何人の人がついてこれたのでしょうかねえ（^| ^）
みんなもうね、やりたい放題ですね本当。大ちゃんスペカなかった
だろう！？＼（> <）ノ

いやあ、でもすつきりしました（^| ^）最近ずっと溜めてた物を吐き出せた気分です。

落ちジャン で連載していたメタリ メタ カからです。作者はジャンプ愛読書ですので、こんなノリは大好きです（^| ^）

こんな自己満足の塊を見てくださったあなたには、本当に感服していますm（――）m

スペシャルサンクス

幻想の巫女 博霊 霊夢 様

力の魔法使い 霧雨 魔理沙 様

七色の人形使い アリス・マーガトロイド 様

氷の妖精 チルノ 様

俊足の妖精 大妖精 様

幻想の境界 八雲 紫 様

闇のおとし子 ルーミア 様

では、こんな死にたくなるような駄文をお読みいただき、真にあり
がとうございました（#^|^#）

b y 澄田 康美

? P S 中2は物語に必須ですよ（#^|^#）そうは思いませんか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0442o/>

東方中2病大戦

2010年10月10日07時52分発行